

## 視 点

### 【Ⅰ】 21 世紀の危機

世界が揺れている。平和と繁栄の普遍的原理とされた欧米型の資本主義・民主主義、いわゆるリベラル・デモクラシーが、世界の各地域で機能不全の危機にある。経済合理性を過度に追求する現代の資本主義は、一部の富裕層と多数の貧困層という格差拡大を招き、本来リベラル・デモクラシーを支えていた中間層（中産階級）が衰退し、不満が鬱積するなかで世界は未来への不安を拭い切れない。

課題を解決できない政治体制に失望した民衆の不満がポピュリズムを生じ、民主主義をむしろ、グローバリズムと保護主義の分断に揺れている。紛争やテロリズム、核の拡散や武力による現状変更、貧困や環境破壊に有効な解決策が見い出せないなど、喫緊の課題は山積している。

大戦を繰り返した 20 世紀の反省から、21 世紀こそは平和の世紀にしたいとの人々の願いもむなしく 9・11 事件が起こり、もはや、いかなる国も 1 国だけでは対処できないほど、世界情勢は混迷を極め、複雑化している。それでもなお私たちは希望を捨てず人類の未来を信じたい。かつて社会学者マックス・ウェーバー（1864～1920）が「人類は、化石燃料の最後の一片が燃え尽きるまで、近代的経済秩序の生活スタイルを続ける享楽人であるだろう<sup>[2]</sup>」と予言したが、危機的状況の中でも、もはや単なる享楽人であり続けることはできない。まさに人類の叡智が問われている時である。私たちは、現状に対しどのように対処し得るのだろうか。

### 【Ⅱ】 日本の課題

日本の状況に目を向けると、2008 年以降、人口が減少に転じ、超高齢化・超少子化時代へ突入した。2015 年厚生労働白書によれば、もっとも悲観的に見た場合、このまま何も対策を講じなければ、2010 年に約 1 億 2,800 万人だった人口は今後減少の一途をたどり、2020 年代初めまでは毎年 60 万人、2040 年代頃には毎年 100 万人が減少。2050 年には居住地のうち 6 割以上で人口が半減、2 割の地域では無居住化すると見られている。<sup>[3]</sup> こうした人口減社会は日本がまだ経験したことのない事態である。

人口減少によって既存の社会・経済システムが維持できなくなれば、日本全体の活力低下は必至である。はたして日本は、この先どうなっていくのか。

確実に言えることは、人口増加社会しか経験したことのない私たちは、史上前例のない「人口が年々減り続ける時代」にあっても、生き抜いて行かなければならないということである。

### 【Ⅲ】 文化こそ生き抜く力

揺れ動く世界と対峙するためには、自らが何者であるか足元を踏み固め、自信と誇りを持って対処しなければならない。さらに日本における少子高齢化と人口減少といういまだかつて経験したことのない試練を乗り越え、ピンチをチャンスに変え生き抜いていくためには、さまざまな方策があるにせよ、つまるところ文化の力がカギとなる。

一つのヒントは近年の人類学研究にもある。<sup>[4]</sup> <sup>[5]</sup> ネアンデルタール人が石器を使いこなすほどの技術を持っていたにもかかわらず滅亡してしまったのは、世代間での知識や経験の文化的伝承がなく、生き延びる知恵や技術が

受け継がれなかったという説である。<sup>[6]</sup> 壁画などで「伝承の文化」を持っていたクロマニヨン人は、氷河期にあっても耐え凌ぎ、集団を存続させた。つまり文化が生きのびる力の源泉となっていたのだ。これは現代に生きる私たちにも重要な視点といえる。

文化はもともと人々の暮らしと共にあり、暮らしに根ざして次代を育む力となり、やがて継承されて伝統となった。共有し継承される文化や伝統があつてこそ、人は明日に向けて夢や希望を抱き、生きる力を奮い立たせることができるのである。文化は決して誰かから強制されたり、与えられるものではない。一人一人が日々の暮らしの中から育んでゆくものである。

私たちがはるかな祖先は、漁や耕作の辛さを紛らわせ、神に祈るために歌い、舞い、それを神に奉じて日々の糧に感謝した。あるいは人々を悪疫や災難から遠ざけ、悩みから救うために像を彫り、神に救いを求めた。

やがてそれらが洗練され、芸術や芸能に昇華されていった。このように文化は草莽（そうもう）より起こり、地域で生きる人々のアイデンティティを形成してきたと言える。為政者のお仕着せや、単に外から珍しいものを持ってくることが文化では決してない。それぞれ固有の文化が継承され、時に異なる文化と出会いお互いに融合し、熟成されたとき新たな文化が創造される。

揺れ動く世界情勢に向き合う時、文化や伝統こそが民族のよりどころとなる。私たちは伝統を引き継ぎ、新たに創造を加え、次世代に引き継いでいかなければならない。

私たちが将来、人口減少や高齢化によって経済的に余裕をなくしたり、不安定な政治や世相の波にもまれることがあつたとしても、日々の暮らしの中で文化を身近に感じ、自らも創造的活動に参加し、伝統によって培われたアイデンティティや心の拠り所があれば、いかなる時代にあつても幸せに生き抜くことができるだろう。

#### **【IV】 地域活性の好機—連携と協奏をめざして**

今日の日本文化の礎を築いた関西では、都（畿内）とその周縁の地域において、農山村の文化、宮廷文化、宗教文化、町人文化など、千数百年にわたり各々の時代に、各々の地域でさまざまな文化が重層的に集積してきた。こうした豊穡な文化風土の中で新たな文化の芽を育むことは、地域活性化に寄与し、日本の未来に貢献することになるだろう。

ときあたかも文化庁の関西（京都）移転に向けて実証実験が本格化し、日本の文化政策を関西で考え、関西発で全国や世界に発信する時がやってこようとしている。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピックを機に、文化プログラムを全国津々浦々で展開しようという呼びかけも始まっている。<sup>[7]</sup> 私たちは、この機会を逃してはならない。文化を地域の活性化に最大限活かすべき時である。そのためには各地域が連携し、あたかも単一の楽器が集まってオーケストラを編成し交響楽を演奏するように協奏することによって、より大きな効果を出していきたい。

都市間で或いは各地域が工夫をこらし個性を競う中で、それらが連携し助け合うことによってさらに大きな力を生

み出すことが出来るだろう。海外でも「コレクティブ・インパクト」<sup>[8]</sup> という手法が注目されている。個人も諸団体も連携することによって、より大きな響きを作り出すことが出来る。明日を担う若い世代と共に奏で、伝統と創造を加えて共に創り出すことによって育てゆく人材に未来を託したい。

---

[2] マックスウェーバー著、大塚久雄訳 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（ワイド版岩波文庫／1991年12月5日・第1刷）

[3] 平成27年度版 厚生労働白書（序章「人口減少の見通しとその影響」第1節「人口減少の見通し」）

[4] 23万年前頃から3万年前頃までにかけて、東はウズベキスタンの山岳から西はイベリア半島の高原までのユーラシアに生存していた古代型人類。1856年にドイツ・デュッセルドルフ近郊のネアンデル渓谷（タール）の洞窟で骨格の一部が発見されたのを機に、古人類学がスタートした。（クリストファー・ストリンガー、クライブ・ギャンプル著『ネアンデルタール人とは誰か』朝日選書・1997年）

[5] ネアンデルタール人が絶滅した理由は、気候変動などの生活環境の変動によって消滅した説、クロマニオン人の暴力的介入により絶滅させられた説、クロマニオン人と混血して吸収された（新人に進化した）説などさまざま、研究の途上にある。イギリスの考古学者スティーブン・ミズン（1960年～）は、ネアンデルタール人の言語は社会的関係のためだけに用いられており、技術的な知能の伝達には用いられなかったと考えている。一方、クロマニオン人は洞窟に壁画を残しており、イギリスの人類学者クリストファー・ストリンガーと考古学者クライブ・ギャンプルは、著書『ネアンデルタール人とは誰か』において、クロマニオン人にとって「芸術」は、社会的な同盟関係を示すシンボルであり、厳しい氷河期を生き延びるために社会的ネットワークや交易を発達させたという仮説を立てている。（赤澤威著『ネアンデルタール人の招待』朝日新聞社・2005年）

[6] 近藤誠一氏（近藤文化・外交研究所代表、元文化庁長官）が下記の講演や雑誌などで、同主旨の話を紹介している。『文化力は国境を越える～音楽・映像の力』（2013年10月31日／〈一社〉渡辺音楽文化フォーラム発行の講演録）、『ロータリーの友』第63巻4月号（2015年4月発行：〈一社〉ロータリーの友事務所）、『KANSAI \* OSAKA 文化力 No.122』（2015年10月／関西・大阪21世紀協会発行）…『関西・大阪文化力会議2015・基調講演』（2015年9月11日：堂島リバーフォーラム）の要旨掲載。

[7] 文化庁ホームページ『文化プログラムの実施に向けた文化庁の基本構想（2015年7月）』

[8] コレクティブ・インパクト（collective impact）は、行政、企業、NPO、財団、市民などが、それぞれの立場を超えてお互いの強みを出し合い、社会的課題の解決を目指すアプローチ。2011年にアメリカのソーシャルイノベーションを扱う雑誌『Stanford Social Innovation Review』の論文で提起された。コラボレーションの手法を用い、共通の社会的な課題解決に向けて人・モノ・金・情報を効果的かつ集中的に投入し、インパクトを創出する。